

いわゆる「史実」と「物語」

—『平家物語』北陸合戦記事をめぐる—

A Study of HOKURIKU-BATTLE in "Tales of HEKE"

山本 一

Hajime YAMAMOTO

はじめに

本稿は、稿者の勤務校地元に関わるため、講義その他で考える機会の多い『平家物語』北陸合戦について、私見を述べたものである。関心の発端が地域にあるとはいえ、本稿そのものは地方史や地誌についての新たな専門的知見を含むものではない。また、『平家物語』研究の現段階に、直接に寄与することを目指すものでもない。むしろ本稿は、北陸合戦をひとつの材料として、いわゆる「文学」と「歴史」の関係について考えることを目的としている。現在、歴史は言葉による叙述であるという観点で、文学研究の世界に浸透しつつある。私もまた、基本的にはそのように考えている。しかしその一方で、「史実」、すなわち言説の外側に独立に現存している事実としての歴史への、信頼あるいは要求は、依然として研究者の中にも学生・一般市民のなかにも存在している。こうした「史実」への要求には、さまざまな必然性があり、「史実など存在しない」といった単純な相対主義や、素人脅しの難解な認識論をふりまわして、それを無視したり蹂躪したりする権利は誰にもない。かといって、史実に虚構や歪曲をつけ加えて

「ふくらませた」のが文学であるとか、文学は「ロマン」だから何を語っても許されるとかいった類の俗論にいつまでも加担していただのでは、文学的営みのリアルな姿は見えてこないことも言うまでもない。この問題を学問的に意味のある形で、しかも市民的な良識に架橋し得る形で整理する作業は決して容易ではないし、もとより本稿のみで果たし得るものでもないが、そのような方向性での模索のひとつとして批判を受けられれば幸いである。

1、砺波山合戦での義仲の迎撃行動

寿永二年(一一八三)四月、北陸平定に向かった平家軍は、越前・加賀の戦闘で勝利を重ね、五月には越中へ攻め入ろうとしていた。『平家物語』(以下『平家』と記す)の諸本は、平家軍の大手が加賀越中国境の砺波山を越えるルートをとる、搦め手は能登半島のつけ根の志雄を経由して越中北部へはいるルートを選んだことを記す(先鋒部隊の戦闘を記す本があることについては後述する)。これを聞いた木曾義仲は急いで越中に入り、迎撃の態勢を整えた。これについて覚一本・巻七は次のように記す(梶原正昭・山下宏明校注の岩波文庫本により一部表記を変更、以下同

じ)。

木曾は越後の国府にありけるが、是を聞いて、五万余騎で馳向ふ。わがいくさの吉例なればとて、七手につくる。まづ伯父の十郎藏人行家、一万騎で志保の手へぞ向ける。仁科・高梨・山田次郎、七千余騎で北黒坂へ搦手にさしかはす。樋口次郎兼光・落合五郎兼行、七千余騎で南黒坂へつかはしけり。一万余騎をば砺波山の口、黒坂のすそ、松長の柳原、ぐみの木林にひき隠す。今井四郎兼平六千余騎で鷺の瀬を打ち、日宮林に陣を取る。木曾、我身は一万余騎で小矢部のわたりをして、砺波山の北のはづれ、羽丹生に陣をぞとつたりける。(ここで章段は「願書」に入る)

木曾の給ひけるは、「平家は定めて大勢なれば、砺波山打越てひろみへ出て、かけあひのいくさにてぞあらんずらむ。但かけあひのいくさは、勢の多少による事也。大勢かさにかけてはあしかりなむ。まづ旗さしを先だてて白旗をさしあげたらば、平家は是を見て、「あはや源氏の先陣はむかうたるは。定て大勢にてぞあるらん。左右なく広みへうち出て、敵は案内者、我等は無案内也。とりこめられては叶まじ。此山は四方巖石であんなれば、搦手はよもまはらじ。しばしおりゐて馬やすめん」とて、山中にぞおりゐんずらむ。其時義仲しばしあひしらふやうにもてなして、日をまち暮らし、平家の大勢を倶利伽羅谷へ追落さうと思ふなり」とて、まづ白旗三十流れ先だてて、黒坂のうへにぞうつたてたる。(岩波文庫二四―二六頁)

ここで義仲は、平家軍を砺波山の山中に足止めさせ、その間に搦め手(もちろん、志雄方面に派遣した大規模な搦め手ではなく、

大手の作戦内部の搦め手である)をまわし、夜襲によつて平家軍を壊滅するという作戦をすでに明確に頭に置いて、布陣を指揮している。この作戦が絵にかいたようにそのまま実現して、平家軍の主力が倶利伽羅谷に追いつき落とされるというのが、覚一本の描き方である。このような記述は、合戦の結果を前提にして、その結果を必然として印象づけるような方向で整理され、様式化されたものであることは、容易に理解されるであらう。しかし、これに対応する記述は、覚一本以外のおもな諸本にもほぼ共通して存在する。屋代本の場合は、義仲の作戦はこの箇所では明確には語られないが、後続の両軍の矢合わせの部分に義仲の狙いを前提とした記述が見られ、状況の理解の仕方は同じであると解される。このことは、このような様式化された事件把握が、比較的早い段階で成立していた可能性を示唆している。少なくとも特定の伝本にのみ帰着させられ得るほど新しいものではない。

一方、このような「義仲の先見性」に主眼を置いた把握とは必ずしもひとつの線であらうな記事が、延慶本などには存在する。

延慶本は、五月十一日に平家軍が志雄方面と砺波山方面に軍を分かつた事を述べた後、越中前司盛俊軍の一部五千余騎が徹夜で砺波山を越え、待ち受けた今井四郎兼平軍と合戦の末に撃破され、撤退したことを述べる。この後、平家軍は再び陣容を立て直し、大手砺波山に七万余騎を、搦め手志雄に盛俊軍三万余騎を派遣することになる。この箇所の記述には多少重複感があり、複数の情報が並列されている印象がある。ただし、平家方の先鋒の敗戦は、諸家も注意するように、五月十六日に京都で九条兼実が入手した情報、

去十一日官軍前鋒、乗勝入越中国、木曾冠者義仲、十郎藏人

行家、及源氏等迎戦、官軍敗績、過半死了、云々。(『玉葉』名著刊行会本)

にある程度対応するものであり、こうした事件に近い時点での情報と関連するものと考えられる。延慶本での義仲軍の動きを見ると、平家軍が陣容を立て直した段階で義仲はようやく池原・般若野に布陣している。般若野は現在の砺波市東部にあたり、越中国の支配にとって重要な地点ではあるが、俱利伽羅峠を越えてくる敵軍をただちに迎撃するには西に偏っている。つまり、延慶本の記述を整合的に解しようとするれば、義仲軍主力の砺波平野進出は遅れたが、先鋒の今井兼平軍は既に現在の小矢部市域まで進出しており、そこで平家軍先鋒と相まみえたことになる。もちろん、そのような細かな地理記述はないが、延慶本のこの箇所の記述は、未整理の感があるとはいえ地理的にでたらめなものとは言えないのである。

さて、般若野にあつて平家軍の動きを察した義仲は、志雄と砺波山とに迎撃軍を分かとうとするが、ここで「宮崎サミノ太郎」が意見を述べる(引用は、汲古書院刊影印本1982により、北原保雄・小川栄一による翻刻『延慶本平家物語本文篇』勉誠社1990を参考に、私意により句読点等を付す)。

「黒坂・志雄山ヲコサレナバ、何クニテカ支ベキ。平家ヨモスガラ山ヲコウルト承ル。黒坂口ヘ付給テ、暫ク支テ御覽ゼヨ」ト申シケレバ、木曾申ケルハ、「大勢ハ夜中ニハ馳合マジギゾ。黒坂口ヘ手ヲ向バヤ」ト評定ス。

この後に、延慶本は、先に引いた覚一本と類同の、義仲の夜襲作戦を記し、さらにいくつかの記事(後述する景家や「馬占」に関

するものを含む)を列挙している。しかし、右に引いた「評定」の結果は、実はこれらの直後の記事を飛び越して、三十丁ウの「木曾身ノ勢ノ定十三騎ニテ先中黒坂口ヘハセ付ヌ。」に接続するようになっている。いま仮にこのようなつながり方を前提に延慶本を読んでいくと、わずかに十三騎で黒坂口についた義仲が、埴生の八幡社を見つけて願文を奉ると、奇瑞があり、そうこうするうちに、

サルホドニ、木曾ガ勢、三千余騎ニテ馳来ル。敵ニ勢ノカサ見ヘナバアシカリナムトテ、松長、柳原ニ引隠ス。トバカリアリテハ五千余騎、同柳原ニ引隠ス。トバカリアテハ七千余騎、トバカリアテハ一万騎、三万余騎ノ勢ハ四・五度、十度ニゾ馳付ケル。皆柳原ニ引隠ス。

と、義仲を追う軍勢がいくつかの塊に分かれて追いついて来て、義仲はそれらを伏兵として配置していく、という展開になる。

もちろん、埴生八幡への願文奉納や軍勢の配置は、覚一本その他にも記される。しかし覚一本では、本節のはじめに引用したように、各部隊の周到な配置を終えた上で、義仲が俱利伽羅での夜襲・殲滅作戦を語り、そのあとに埴生八幡への願文奉納をするという形になっている。繰り返すようだが、覚一本の義仲は、結果を見通して作戦を立てているのである。一方、上記の脈絡で延慶本を読むと、はじめ般若野に布陣していた義仲が、平家軍主力の平野部進出を許すことの危険に宮崎太郎の進言で気づき、取るものも取り敢えず少数を率て黒坂口へ向かい、他の部隊が慌ててこれに引き続くという、いまだ不確定な状況の中での切迫した判断や行動が描かれている。私はそれを理由にいわゆる「史実」との距離を考えようとは思わない。ただ、延慶本の中には、覚一本と共通の、先を見通した作戦行動をとる義仲とは別の脈絡の義仲が

見て取れることを指摘したい。しかも、この二つの描き方は、全く無関係ではなく、明らかに共通の根がある。それは、平家軍主力の平野部進出の成否が、この時の合戦の鍵であるという理解である。

この点を、節をあらためて考えたい。

2、源平両軍の布陣

加賀平野を東へ進んで越中国に入るには、直接にせよ能登南部を経由するにせよ、国境の山地を越えなければならない。ただし、これらの山地は、切り立った山脈や大規模な山塊ではなく、標高数百メートル程度の浸食の進んだ山々のつらなりである。

加賀から直接越中に入る場合、現在の主要幹線道路は、俱利伽羅峠より北に寄った安楽寺越えを経由しているが、そのほかにも山あいの谷筋をたどって石川・富山を結ぶ道路はいくつもある。

中世にも越境路がいくつかあったことは、後に見る延慶本・長門本などの記述からうかがえる。俱利伽羅峠付近の現状は、観光用自動車路が設けられるなど、とうてい中世の状況は窺い得ないものとなっているが、それでも、落差は小さいものの谷筋の入り組んだ、騎馬の大部隊が作戦行動をとるのは困難な場所であったことは推測できる。水原一の「狭い俱利伽羅峠が主力壊滅の戦場ではあり得ず」（新潮日本古典集成・中・一九九頁頭注）という史実レベルの判断も、このような点を踏まえたものであろう。一方、越中側の現在の小矢部市の市域では、北から南へ流れる小矢部川沿いに平坦な地形が広がっている。平家諸本が義仲に語らせているように、いったん平家軍がこの地域に進出して陣容を整えてしまえば、戦闘は兵力の多寡にかなりの程度左右される（少なくともそう考えられたとして自然である）。延慶本などが描く先鋒どうしの合戦は、結果的に平家方の敗北に終わったとはいえ、伯仲

した勢力による激戦として描かれるのもこのためである。そして、ここでの合戦に勝利した側は、越中国平野部全体を制圧することが可能になる。

平家諸本は、右のような軍事地理的な「事実」性から全くかけはなれた話を作ることではできなかった。また一方、平家軍が越中に侵入しようとして撃退され、これをきっかけに敗走したことも当時の誰もが否定できない「事実」であった。これらふたつの「事実」をもっとも簡明に結びつけた説明は、俱利伽羅峠に平家軍を足止めにし、夜襲により殲滅するという作戦を義仲が当初から持っており、伏兵の配置・搦め手の展開・旗差しの派遣による牽制、という周到な準備によりそれを成功させたというものである。覚一本は、物語をこの簡明な説明に絞り込んだのである。

しかし延慶本は、先に見たような義仲の行動の状況的な描き方のほかにも、右の説明と不協和な記事をいくつか記している。ひとつは、既に述べてきた五月十一日の先鋒どうしの合戦であり、異同はあるが長門本と盛衰記にも見えるものである。ただしこの話は、文字通りの先鋒戦として捉えれば、主力どうしの合戦である諸本共通の俱利伽羅峠夜襲の話と、はっきり矛盾するというわけではない。ところが、延慶本のみに見られる二つの断片的な記事は、一見してその位置づけが理解しにくいものである（なお、これらの記事については砂川博『平家物語新考』東京美術1982・12に別の面からの考察がある）。

ひとつは、平家軍に「軍ノ日ヲ点ジテ吉凶ヲウラナフ男」があつて、九月以前のいくさは不利だから「引キ退キテ後陣ヲカタメヨ」と忠告したのを、貞能への対抗意識にかられた景家が無視して合戦を急いだというもの。この書きぶりは、景家の焦りが平家方の敗因のひとつになったというつづきを期待させるが、現存本ではそのようなつながりは見いだせない。諸本共通の説明では、義仲

は巧みに平家方を牽制して山中に滞留させているのである。平家がいくさを急いだという記述はこの理解とかみ合わない。これにすぐつづいて延慶本が語る「馬占」の記事も不審である。義仲が三十匹の馬に鞍を置き、戦勝の祈願を神明が納受するならば敵陣に入り、否ならば離散するように起請して放したところ、「カノ馬一列二群レ引テ、摂津判官盛澄ガ陣ノ中へ三十疋ナガラ」駆け入って盛澄を驚かしたとするものだが、山中の陣地に麓から馬が駆け入るのも不自然であるし、そもそも山中に釘付けにしておくべき敵の陣地に、わざわざ馬を追いつ込んで驚かせるのも愚策である。この二記事は、全く別の箇所からの竄入である可能性も否定しきれない。しかし、砺波山合戦と関係のある記事であったという前提に立てば、これらの話は、諸本共通の説明とは別個の脈絡に属していたと考えなければならぬであろう。その脈絡では、先の先鋒の後、景家に率いられた部隊も山を越えて源氏軍と接触していた。また盛澄の率いる部隊は越中側に降りた山麓に布陣して、源氏方に対峙していたのである。

このような、現存本では表面に出ない脈絡(平家軍主力が一団となって俱利伽羅峠付近に足止めされていたのではなく、部分的に平野部に進出していたという理解に立つ)の現実性を検討するために、延慶本と長門本とに見られる地元武士の作戦進言について併せて見ておきたい。

延慶本では、義仲に質問を受けるのは、安宅の戦での負傷の癒えた「石黒ノ太郎忠直」と越中国の住人、「中村三郎忠綱、ムクタノ荒次郎村高」である。この問答は、義仲が作戦を既に決定してから行われたことになる点や、安宅の戦いや石黒太郎についての記述がこの前にならないなど、現存形態では整合性のない箇所であるが、今はその点は追求しない。彼らの答えのうち、具体的な地勢についての部分に注意しておきたい。

黒坂ニ取テ三ノ道候。北黒坂、南黒坂、中黒坂トテ候。北ニハ又、安楽寺越、南ニハカムダゴヘ、ホラ坂ゴヘトテ、路ハ多ク候ヘドモ、余ノ方ヘハ何ノ道ヘモ敵向タリトモ承リ候ハズ。中黒坂ノ猿ノ馬場ト申処ニ陣ヲ取テ候ナレバ、カシコハ無下二分内セバキ所也。先陣後陣押合セテ、セメモニ無下二安ク覚候。

一方、長門本では、義仲と問答するのは、越中国宮崎(現富山県朝日町付近)の住人宮崎太郎で、彼は加賀の住人富樫太郎と安宅(現石川県小松市付近)の戦いで善戦し負傷し、郷里で治療したのち義仲のもとに参上している。俱利伽羅峠の包囲作戦は、宮崎太郎が詳細に進言して義仲が採用することになっている。話の流れは延慶本より自然であるが、この形が本来かどうかは判らない(前述のように延慶本では、宮崎太郎は別の箇所で義仲に進言している)。ところで、進言の前提となる地勢の把握であるが、

此砥波山には三の道候なり。北黒坂、中黒坂、南黒坂とて三候。平家の先陣は中黒坂の猿が馬場にひかへて候也。後陣は、大野・今湊・井家・津幡・竹橋などに宿して候也。中の山はすいてぞ候らん。よもつゝき候はじ。(岡山大学本翻刻、福武書店1977により濁点を補う)

となつてゐる。比較すると、延慶本は国境越えの道を列挙し、長門本は後続部隊の宿営として地名(現石川県金沢市北部および石川郡津幡町)を列挙している。いずれも地名は根拠のあるもので、本の成立までのどこかの時点で現地情報を参照していると見てよい。一方、延慶本では狭いところに「先陣後陣」がひしめき合っ

ているから攻めやすいとし、長門本は先陣と後陣との間が長く延びているから、先陣のみを殲滅するのには有利だと言っている。一見背反する二つの本の記述の背景にある、現地の地勢の戦術的な問題点に注目したい。

その問題点とは、平氏軍がいくつかある迂回路を利用しなかったことである。山越えにひとつの狭い道をとる限り、大軍の全体は長門本が記述するような縦長の形になるほかない。そして、行軍の先頭部分では延慶本が言うように押し合いへし合い状態になってしまはずである。細長く延びた兵力は、山中であれ、平野への降り口であれ、敵に遭遇した場合に力を発揮できない。地の利を得ての防御戦ではなく、不案内な土地での攻略戦の場合はとくにそうである。先端部隊が撃破されれば、後続は状況が判らないまま敗走することになりやすい。砺波山で起こったことは、巨視的にはこのような事態であったことは間違いない。

逆に言えば、平家軍が勝利を得るには、軍勢を分散していくつかの道から山越えをさせ、砺波平野で合流して源氏軍に対峙するなど、計画的にしかも急いで全兵力を越境させる必要があった。勝敗の分かれ目がここにあったことは、『平家』諸本の義仲描写の共通認識である（前節参照）。平家軍がなぜそのような作戦をとれなかったかは判らないが、戦闘の後に京都の兼実が受けた情報に、『彼三人郎等、大將軍等、相争権盛之間、有此敗云々』（『玉葉』六月五日条）とあることは注意される。『三人』は、少し前のところに「盛俊、景家、忠経」と示されている。敗戦の後の結果論かも知れないが、平家軍の一部の武將が功を急いでおなじ道から小兵力でつぎつぎに越境し、個別に源氏軍に遭遇して撃破され、彼らの退却が全軍の敗走を引き起こしたという事情を暗示するように見える（『玉葉』のこの記述には、前掲水原一も注意している）。巨視的な状況をこのように想定すれば、前述の延慶本

の断片的独自記事のようなものも、その状況に由来する情報として解し得るのである。

もちろん不明な「史実」を規準に物語の「虚構」を計ることはできない。しかし、砺波山合戦には（他のさまざまな戦闘と同じように）、さまざまな局面が存在した。あまりにも整合した義仲の作戦の成功と、それを砺波山合戦の全てに置き換える叙述からは、そのような意味での現実性が失われている。それは、義仲の軍事的才能と神明の加護とのみを浮かび上がらせるよう、様式的に整序された物語である。重要なことは、このような整序された叙述が、おそらく『平家』の初期の段階から、平家軍の劇的な敗北という結果に対する説得力ある説明として出現し、やがて諸本のそれに整合しない記述を痕跡程度にまで駆逐し、覚一本のような完成された形へ帰着したであろうということである。煩瑣な現実性を切り捨てたいという欲望は、物語を生き延びさせるひとつの（唯一のではないとしても）大きな力である。

3、義仲の進路など

長門本をのぞく諸本は、俱利伽羅峠で勝利を収めた義仲が、形勢不利な捌め手の行家軍を救援するため、志雄に向かうことを記している。覚一本などでは、その際、「ひゞの湊」を馬でわたる場面がある。現在の富山県氷見市付近であろうが、地理的に無理があることを諸注が指摘している。大伴家持の探訪によって名高い布施湖が、中世どのような水域を持っていたかは確定できないが、その一部を渡ったと拡大解釈すれば必ずしもありえなくはない。しかし、延慶本に「安宅の湊」と記すことが暗示するように、この記事は本来の位置から移動しているのではないかと考えられる。長門本は、砺波合戦の前後にそれぞれ加賀国安宅で合戦があったことを記し、水面を渡る軍勢を具体的に描いている。この記事

を援用して、義仲の救援行を劇的に描こうとした結果が他の諸本の記述であろう。

北陸合戦記事全体での長門本の独自性はかなり強く、しかも一概に後補などとして処理できない点が少なくないが、この箇所もなんらかの程度の原因をうかがわせる。ただし、その反面、志雄合戦について長門本は、巻十四巻頭に、

同日、志雄軍に十郎藏人行家まけいろになりければ、越中
のぜんじもりとしかつにのりてせめた、かう。

とのみ記し、後続にはこれを受ける記事がない。何らかの脱落、もしくは右の記事の方の竄入を考えるべきであろう。

また覚一本は、志雄合戦に勝利した義仲が、「能登の小田中、新王の塚の前」(石川県鹿島町)に布陣したことを記すが、これについても地理的矛盾が指摘されている。志雄で越境した義仲が、加賀国へ向かわずに能登中部へ北上したことになるからである。この記事の由来は確認できないが、浅香年木は、当時の能登の軍事情勢が反映した可能性もあるとする(『石川県志雄町史』1974・11第二章四節「志保山の合戦」)。しかし、延慶本などには見えないことから考えれば、やや後世に現地にあった伝承の反映かとも思われる。ただその場合も、義仲が能登経由で加賀に入ったという情報が早くに存在し、それがこのような伝承を生み出したとも考えられる。

しかし、細かな行程の問題よりも、この搦め手への援軍という設定自体の現実性に問題がある。俱利伽羅付近から志雄までの行程は、直線化しても三〇キロにはなろう。夜間戦闘の後に援軍に向かうのは、物理的に不可能ではないまでも、兵馬の疲れなどを考えれば有効な行動かどうか疑わしい。そのような設定をして義

仲を能登に向かわせる必要がどこにあったのであろうか。義仲が能登経由で加賀に入ったという否定しにくい情報、「事実」性を持った情報が存在したからではなからうか。そのように考えれば、義仲軍は当初から志雄を志向し、砺波で戦った方こそ「搦め手」の部隊であった可能性も無視できなくなる。

このような問題について、「史実」を一義的に確定することにどれほどの意味があるかはよくわからない。以上に考えてきた「現実性」や「事実」は、あくまで我われが考え得る「現実性」や「事実」にすぎず、義仲が実際に何をしたかについては不明とすることがない。当初から明確であったのは、繰り返すようだが砺波山合戦を契機に平家軍が敗走に転じ、それを追走した反平家軍の総帥が義仲であったという、いわば「結果」のみである。『平家物語』諸本は、この結果を必然的なものとして描こうとする中で、義仲の予見性(俱利伽羅峠での作戦)や行動力(志雄への急行)を強調する方向に進んだのである。

なお、合戦を劇的に描く営みの極に、『源平盛衰記』による「火牛の計」の増補がある。周知のように長門本では、加賀での攻城戦で平家軍がこのような戦法を用いたことになっている。『盛衰記』はこれを材料に俱利伽羅合戦を脚色したものと見られる。平野に放牧されている牛を利用する長門本の設定と較べて、山あいの道に多数の牛を追いつける『盛衰記』の設定が非現実的なのは明らかであろう。これを、単に「史実」につけ加えられた「虚構」と見るのは平板すぎる。砺波山の合戦が源平争乱のひとつの転換点であったという結果的な歴史認識が、この戦いにいやがうえにもドラマティックな性格を与えることを促しつつあったのであった。そして、流布本平家物語と『源平盛衰記』が近世に刊行されて多くの読者を得たことによって、様式化されて描かれた義仲の巧みな策略と、「火牛の計」の映像効果によって特徴づけられる俱利

伽羅合戰譚は、少なからぬ刷り込み効果を持って人々の心に浸透していった。この刷り込みには、この合戦が「歴史を動かした」という認識がともなわれていた。近代日本の軍事思想の中にかいま見える巧妙な奇襲作戦への過大な依存傾向は、このような刷り込みのひとつの「予期せざる結果」であつたかもしれない。

単に「真実の歴史」を「文学」から分離しても、現実性を見失わせる物語の魔法は解けない。「歴史の物語」を生み出すメカニズムを見通す場所に、執拗に立ち戻ることが必要なのである。